

リアス・アーク美術館と東日本大震災

The Rias Ark Museum of Art and the Great East Japan Earthquake

寺 岡 聖 豪

Seigo TERAOKA

学校教育研究ユニット

(令和6年9月27日受付, 令和6年12月23日受理)

1. 問題設定

私たちはミュージアムに何を求めているのだろうか¹。好きな画家の作品を展示する特別展が開催されていると知り, 足を運ぶ。地元の古墳に関する講演会が行われているので, 足を運ぶ。ミュージアムに併設されているレストランで友だちと食事するために, 足を運ぶ。私たちはさまざまな理由で, ミュージアムに出かける²。それに対して, 本研究では「ミュージアムはまちの現在地を知ることができる施設である」ことについて考えてみたい。そこで, 宮城県気仙沼市のリアス・アーク美術館(以下, リア美と略記)に着目し, どのように東日本大震災(以下, 震災と略記)が展示されているかを読み解く³。

東北地方太平洋沖地震による津波とその後の大規模な火災が気仙沼市に最大級の悲劇をもたらし, 産業の中心である沿岸部に壊滅的な打撃を与えた⁴。その結果, (ア)震災の前後を比較すると, 気仙沼市の人口はどのように変わったのだろうか。(イ)気仙沼市は「海と生きる」三陸の水産都市の1つに数えられるが⁵, 水産業と水産加工業は震災を境にしてどのように変わったのだろうか。この2点について考える際, 統計の数字だけでなく, リア美の, 2つの常設展示, 「東日本大震災の記録と津波の災害史」と歴史民俗資料「方舟日記～海と山を生きるリアスなくらし～」も参照できないだろうか。というのは2つの常設展示は気仙沼市の歴史を考える際に示唆を与えてくれるかもしれないからである⁶。言い換えれば, リア美は気仙沼の移り変わりを知るうえで「定点」の役割を果たしているように思われる。それゆえ, リア美を手がかりにして, 気仙沼市の現在地を知ることができる考えた。そこで, 問いを設定する。(1)絵画や彫刻などの美術品を収蔵し展示する美術館において, なぜ震災が伝承されるのか。(2)リア美では何が展示されているのか。(3)リア美ではなぜ常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」(以下, 常設展示と略記)という形で震災が伝承されるのか。(4)そもそも震災を伝承するとはどういうことなのか。

本研究でリア美を取り上げるのは常設展示に着目するからである。リア美は震災直後の2011年3月23日より次のことを目的とする調査活動を始めた。

「東日本大震災及び大津波によってもたらされた, 気仙沼市, 南三陸町への災害被害の実態を記録, 調査し, それらを復旧, 復興活動において有効に活用できるように取りまとめること」(山内 2014 3)。

調査を終えて, 常設展示は2013年4月3日に公開された。常設展示は学芸員が被災現場で撮影した写真203点, 収集した被災物155点, 歴史資料など137点によって構成されている。ここで注意してほしいのは被災物という表現である。常設展示図録によれば被災物とは次の通りである。「被災した人を被災者と呼ぶように, 被災した物は被災物と呼べばいい。ガレキという言葉を使わず, 被災物と表現してほしい」と(山内 2014 127)。瓦礫とは瓦片や小石のことであり, 価値のない物, 取るに足らない物を意味する。しかし, 被災者(調査活動した学芸員を含む)にとって, 「ガレキ」などというものは存在しない。被災物とは破壊され, 奪われた家であり, 家財である。また, それらは被災者にとって, かけがえのない人生の記憶で

もある。それゆえ、リア美は単に記録資料を残すのではなく、正しく伝えていくことを追求した。そして、伝えるためには「伝える意志と伝わる表現」が必要だという立場をリア美はとった。リアス・アーク美術館館長・学芸員、山内宏泰によれば、そのために選ばれた方法が「アート」だった⁷。常設展示は「東日本大震災をいかに表現するか、地域の未来の為にどう活かしていくか」⁸というテーマのもとで編集された。

管見の限り、リア美に最も早く着目した人物の1人としてノンフィクション作家、神山典士⁹を挙げたい。神山は季刊誌『地域創造』において、リア美が2006年9月に開催した特別展「描かれた惨状 風俗画報に見る三陸大海嘯の実体」に着目した。「描かれた惨状」とは明治29(1896)年、三陸地方を大津波が襲ったときを描いたものである。特別展が開催された2006年は三陸大海嘯¹⁰からちょうど110年目に当たっていた。それゆえ、リア美の学芸員、山内宏泰は特別展には多くの人が訪れるだろうと期待した。しかし、思ったほど来館者は集まらなかった。震災では気仙沼市周辺で約2400人が犠牲になった。それにもかかわらず、特別展を訪れたのは1200人に過ぎなかった。山内はこの落差に接して、人びとの津波への危機感が欠如していると嘆いた。そして述べる、「毎年大雪が降る北国には『雪国文化』がある」ように、津波が常襲する三陸には「津波物語」が伝承されなければならないと。神山はリアス・アーク美術館訪問記「津波の記憶を語り継ぐために」の最後を次の言葉で締めくくった。「人間の記憶を追体験できる表現の館としての美術館。三陸では、今こそ美術の力が必要とされている」(神山 2012 27-29)。

リア美に最も早く着目したもう1人の人物として美術評論家、榎木野衣を挙げたい。榎木は月刊誌『美術手帖』において2014年から2016年まで連載したものをまとめ、『震美術論』(2017)を刊行した。榎木は震災を1つのきっかけとして、自然災害による破壊と復興、そして反復と忘却を繰り返してきた日本列島という「悪い場所」において、果たして、西欧で生まれ発達した「美術」が成り立つかを問うた。榎木は2011年6月にリア美を訪問し、学芸員の山内宏泰と面談する。そして、山内は面談後、榎木へ手紙を書いた。

「学校からの集団避難中、波に吞まれたクラスメート全員が死んでしまった。更に祖父母、母親、妹も死んでしまった。そんな現実を突きつけられた小学5年生の少年が、テレビのインタビューに対し、『死んだ妹や友達の分までしっかり勉強して立派な大人になりたい』と答えていました。そんな境遇にある子供に対し、大人がプレッシャーをかけたからそのような言葉が出てくるのです。なぜそんなことを言わせなければならないのでしょうか。彼の言葉の中に、被災者に対する世間の意識の大きなズレを感じずにはいられませんでした。そういう子供に＜アートなるものをさせたがる＞人間をどうすればいいのでしょうか。＜アート＞とはなんなのでしょうか」(榎木 2017 144/145)。

これは「みずから勤める美術館も含めて被災した列島の美術をめぐる当事者が、壊れた美術館の中で書きつけた言葉」である。そして、山内は問う、「いま芸術を通じて私になにができるか」ではなく、「いま私を通じて芸術はなにがしたいのか」が問題だと(榎木 2017 143)。そこで、山内は「記憶を伝える表現」として、常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」を構想した。常設展示は公開されると、数多くの人びとを惹きつけた。国内だけに限っても、地元、宮城県の新聞社やテレビ局だけでなく、全国紙においてもリア美は取り上げられた。そして、研究者や大学生・大学院生など多数が訪れたという¹¹。

では、リア美を手がかりにして「震災とミュージアム」について考察することで、何が明らかになるのだろうか。結論を先取りすれば、次の通りである。第1に当たり前のことだが、震災ミュージアムは被災地、震災が起こった場所に立地する。そして、リア美では被災者の語りではなく、被災地で収集されたモノによって震災を展示＝表現した。収集されたモノとは被災物であり、ここにアートが関わったという。第2に、震災は小中学校で社会科や理科などの授業で取り上げられているのに対して、リア美という生涯学習施設で震災が展示されているのを見学して、子どもたちは学校の授業では知り得ないことを感じ、学ぶだろう。広島平和記念資料館(広島県広島市)やひめゆり平和祈念資料館(沖縄県糸満市)、国立ハンセン病資料館(東京都東村山市)、水俣市立水俣病資料館(熊本県水俣市)など、戦争や疾病、公害という人類の「負の記憶」をテーマとしたミュージアムを思い浮かべてほしい。これらのミュージアムの空間に身を置くと、人びとはそれぞれの歴史に思いを馳せ、この先を生きる知恵と力となるようなきっかけをつかむのではないだろうか。そのため、これらのミュージアムでは展示物を前にして、物思いにふけったり、何かをじっと考えたりする来館者が少なくない。リア美もこれら「負の記憶」をテーマとしたミュージアムの1つに数えられる。「震災の記憶空間」とも言えるリア美は被災物によって震災を子どもたちに伝えようとした。

2. リアス・アーク美術館の概要

リア美は今から約 30 年前、1994 年 10 月 25 日に宮城県気仙沼市に開館した美術館である。パンフレット（リア美）によれば、同館は宮城県の気仙沼・本吉広域圏の「地域文化創造プロジェクト事業」の中核施設として設立された。所在地は気仙沼市の市街地から南西 2.5km のところにあり、気仙沼湾を見下ろす丘陵地帯の一角に位置する。

リア美は「『圏域住民への質の高い芸術文化に触れる機会の提供』と『住民の創作活動や発表の場の提供』を通じ、美術的な視点から個性豊かな圏域文化を創造しようとする生涯学習施設」である。そして、「東北・北海道を 1 つのエリアと捉え、美術をはじめとする芸術文化を継続的に調査、研究することを基本方針とし、常設・企画事業を展開している」（パンフレット（リア美））。

当館名称の由来だが、リアスとはリアス式海岸を有する気仙沼・南三陸地域を意味する。アークは方舟であり、歴史・文化・芸術の保存・普及・継承を意味する。さらに、常設展示図録から補足する。「リアス・アーク美術館はその名が示す通り美術館であるが、地域の歴史、民俗、生活文化を普及する常設展示を持つ変則的な美術館と言える。そういった特性上、震災以前から津波も地域文化の一端を築く文化的要素ととらえ、文化史、災害史として調査研究してきた経緯がある」（山内 2014 149）。

同館のエントランスは 2 階に位置するが、そこでは①気仙沼の食を軸とした歴史民俗資料を集めた常設展示「方舟日記」と、②当館所蔵の作家の美術作品を集めた収蔵美術作品が展示されている。それに対して、1 階では③もう一つの常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」が展示されている。これは山内宏泰（2011 年当時は学芸員だったが、2024 年現在は学芸員だけでなく館長も務めている）をはじめとする学芸員が 2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震の直後から 2 年間に渡って行った「東日本大震災 記録調査活動」によって得られた記録写真や被災物、三陸沿岸部を中心とした過去の津波災害の資料等を展示したものである。

3. ポジショナリティ

ポジショナリティ（positionality）を手がかりにして、常設展示についてさらに考察したい。ポジショナリティとは当事者・研究者などの「立ち位置」を意味する。「《東日本大震災 記録調査活動》報告書」（期間：2011（平成 23）年 3 月 23 日～2012（平成 24）年 12 月 31 日）¹²によれば、調査活動に携わった山内宏泰は「《震災被害調査》と表記したプレートを作成し、それを身に付けて」行動した（山内 2014 164）。しかし、普段着を着てコンパクトカメラを持って調査活動すると、「社会的な立場が服装からでは判断できず、周囲に不信感を抱かれ」た。そこで、山内は調査活動する際にはページの作業服を身に着けた。そうすると、「市役所の職員」と認識されるようになった。では、「東日本大震災 記録調査活動」を担った山内宏泰はいかなる立場に立っていたのだろうか。山内のポジショナリティはどのようにとらえたらよいのだろうか。

山内は調査活動を振り返って、次のように述べる。「被災者に無用な不信感、恐怖感を抱かせない適切な服装」を着用し、身分証を首から提げていても、調査員とはいったい何者であるかを説明することは難しかったと（山内 2014 164）。たとえば、「教育委員会の者です」と名乗ると、多くの場合、それで通じた。しかし、住民から「市役所の方ですか」と問い返されることもあった。そこで、「広域組合です」と答えると、首をかしげられ、さらに「では、消防ですか」と問われた。それに対して、「気仙沼・本吉地域広域行政事務組合の教育委員会の職員です」と答えた。そうすると、「それは何ですか」というように被災者のなかで疑問が膨らんだ。そこで、最終的に「美術館学芸員です」と話した。そうすると、「なぜ美術館？ 学芸員って」という反応が返ってきた。

一般的に、美術館は絵画や彫刻などの美術品を所蔵・展示する施設として認識されている。それゆえ、《震災被害調査》と表記したプレートを首から提げて被災地を歩き回ると、美術館のスタッフが何をしているのかと怪訝に思われた。また、「そもそも学芸員とは何か」を理解している住民はほとんどいなかった。だから、山内は「美術館」という言葉は使わず、「広域組合職員」と名乗った。プレートには「気仙沼市・南三陸町 震災被害調査 広域行政組合 社会教育係 東日本大震災記録・調査担当 リアス・アーク美術館 学芸係長 学芸員 山内宏泰」（山内 2014 164）と記載されていた¹³。したがって、山内は学芸員として採用された 1994 年以来、気仙沼市在住ではあったが、「東日本大震災 記録調査活動」中は住民にとっ

て「正体不明」の存在だったとは言えないだろうか。

「東日本大震災 記録調査活動」に携わる山内と報道関係者との差異について考えてみたい。報道関係者たちは被災現場に足を運んだ。ただし、報道関係者がカメラを向けたのは「インパクトのある被災現場」や「被災者の苦悩する姿」、「復旧に当たる者の献身的な姿」である（山内 2014 165）。それに対して、山内も同じく被災現場に足を運んだが、山内は立ち止まることがしばしばあったという。というのは1994年以来、約17年間、気仙沼市で暮らしていても、大半の建物が破壊されてしまったため、そこがどこかわからなかったからである。そこで、被災現場ではこれからこの場所で暮らしていく者として、山内は津波によって破壊されたが、一部が残った建物を目印にして、住宅地図を見ながら、そこがどこかを特定しながら撮影した。「報告書」によれば、山内は「震災による被害を記録すると同時に、震災以前のまちの姿を、最後の姿として」残そうとした¹⁴。これが山内のポジションナリティである。

4. 常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」の概要

これまでに述べたことと重複するところもあるが、常設展示の概要についてさらに考察する。リア美では震災発生直後から、学芸員が約2年間に渡って震災被害を記録し、調査のために活動してきた。

図録によれば、常設展示では前半に「被災現場からのレポート」として、被災直後から被災現場の多種多様な現場をまとめている。後半は「被災者感情として」、「失われたもの・こと」、「次への備えとして」、「まちの歴史と被害の因果関係」という4つのテーマで構成されている。

被災現場写真には撮影した際に感じたことや考えたことが文章で添えられている。展示された被災物は「津波の破壊力、火災の激しさなど、物理的な破壊力等が一見してわかるもの」、「災害によって奪われた日常を象徴する生活用品や、震災以前の日常の記憶を呼び起こすもの」という2種類に分けられる。被災現場で収集した被災物は私たちに何かを話しかけてくるように調査員・山内には感じられたので、その言葉を物語として、それぞれの被災物にキャプションとして添えた。

さらに、震災発生から2年間、被災地で生活するなかで得られた情報や、調査活動から見えてきた課題を「東日本大震災を考えるためのキーワード」として文章化し、展示資料と並行する形で添えた。

なお、「依然として震災の只中にある現在、まとまりのある文脈で、ものを語れる時期でないとの判断から、あえて時系列の編集ではなく内容重視の編集構成」（山内 2014 3）とした。以上のことから、展示物のキャプションは膨大な文字量となり、常設展示は「見る」というよりもむしろ「読む」ものとなった。

（あ）被災物

常設展示には前述した通り、被災物という聞き慣れないものが展示されている。しかし、実際に陳列されたのは洗濯機や炊飯器、固定電話の受話器などであり、珍しくはない。被災物とは私たちの身の回りにある、ありふれたものだった。被災物とは山内による造語である。

次に、被災物に付されたキャプションについて述べたい。キャプションとは展示物の下や横に貼られる小さなパネルである。そこには被災物が収集された地名や年月日が記載されている。そして、山内は来館者の理解を促すために、被災物に関する説明をナラティブ（話し言葉）で書いた。ただし、ナラティブは被災物の所有者が語ったものではない。「東日本大震災 記録調査活動」において見聞きしたことをもとにして山内が創作したという。これはミュージアムとしては極めて異例なことである。しかし、山内によれば、これがアートだった。では、キャプションを見ていく。

「洗濯機 2012.11.22 気仙沼市本吉町三島」と題された被災物には次のようなナラティブが付された。「我が家はバラバラになって、流されて、田んぼにまき散らされてしまったんです・・・秋口に、ぬかるみが、ようやく歩けるくらいになって、それっで、気になっていた洗濯機を見に行ってみたんす。やっぱりうちでした・・・洗濯機の中に泥が積もってました。／洗濯機って、脱衣所とか、洗面所にあるでしょ。あそこって、身もそうだけど、心も清めるっていうか・・・お風呂とかね。安心できる場所。いろいろきれいにするそういう場所と、洗濯機ってセットなんだよね。／なのに泥が入ってて・・・見なきゃよかったって・・・悲しくなった」（山内 2014 78）。

「炊飯器 2012.2.2 気仙沼市朝日町」と題された被災物には次のようなナラティブが付された。「平成元年ころに買った炊飯器なの。じいちゃん、ばあちゃん、私、お父さんと息子2人に娘1人の7人だもの。だから8号炊き買ったの。そんでも足りないくらいだね。（中略）／裏の竹やぶで炊飯器見つけて、フタ開け

てみたら、真っ黒いヘドロが詰まっていたの。それ捨てたらね、一緒に真っ白いご飯が出てきたのね・・・夜の分、残してたの・・・涙出たよ」(山内 2014 79)。

「受話器 2011.8.25 南三陸町歌津伊里前」題された被災物には次のようなナラティブが付された。「俺は二代目で、おやじが始めた店だったのさ。当時は黒電話でしょ。店で使ってた黒電話。(中略)もちろん使ってなかったけども、毎日、親父が店で注文取ったりして使ってた電話だったから(中略)店の神棚の脇に置いてだねえ。親父の形見でさあ、店守ってもらってだんだよね。／再開する予定はないねえ。学校相手の文具屋で、学校廃校では・・・まず商売にならねえもの」(山内 2014 81)。

このようにキャプションは話し言葉で書かれている。そのため、来館者はこれを読むと、自分に対して語りかけられているように感じるかもしれない。繰り返すが、これは山内による創作であり、フィクションだった。それに対して、あいちトリエンナーレの五十嵐太郎・芸術監督は「想像力によってキャプションをつくるのは一種のアート」だと語る。そして、「言葉を読んでいるうちにひとごとではなく、追体験しているようになる」(朝日新聞 2013年9月10日)。同記事によれば、「かつて被災地で覆われた地域はいま、大半が更地となった。初めて見る者には2年半前の光景を想像することはできない。(しかし)同館を訪れて「初めて分かった」と話す人たちが多いという」(朝日新聞 2013年9月10日、「(しかし)」は論者が補足した)。

収集された被災物はこれらのほかに、トランペットや一眼レフ、TVゲーム機、ぬいぐるみ、携帯電話などである。では、「東日本大震災 記録調査活動」を進めていくなかで、なぜこれらは収集されたのだろうか。ここで、仮説を立てる。この調査はもう一つの「文化財レスキュー」だったのかもしれない。文化財レスキュー事業とは「自然災害により被災した美術工芸品を中心とする文化財等を緊急に保全し、廃棄・散逸や盗難の被害から防ぐため、災害の規模・内容に応じて文化庁が立ちあげる事業」¹⁵のことである。繰り返すが、収集された被災物は洗濯機や炊飯器、固定電話の受話器などであり、美術工芸品ではない。しかしながら、震災前の気仙沼の人びとと生活を伝えるために山内によって収集されたのがこれらのものだった。地震と津波によって破壊され、流失した、これらの被災物は山内によって震災前の気仙沼の人びとと生活を象徴する「文化財」として見いだされた。このように考えることはできないだろうか。なお、山内は大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立民俗博物館が行った文化財レスキュー、『東日本大震災と気仙沼の生活文化』(2013)に参加していた。この活動が行われたのは宮城県気仙沼市や岩手県陸前高田市である。地震と津波は家屋だけでなく、人びとの生活も破壊した。そして、地域の人びとの生活文化や歴史を文化財として収蔵してきた博物館や資料館などの文化施設や、地域の記憶を保管してきた旧家が被災したので、被災した文化財を救い出す事業が行われた。一般的に文化財レスキューと言えば、こちらを指す。それに対して、リア美が行った「東日本大震災 記録調査」は正式には文化財レスキューではないが、本研究ではもう一つの「文化財レスキュー」として位置づけられるのではないかと考えた。

(い) 現場写真

常設展示では被災物とともに、被災現場で撮影した写真203点が展示されている。震災直後、2011年3月11日15時30分にリアス・アーク美術館屋上から気仙沼市内湾付近の状況を撮影した写真がある。これに付されたキャプションは次の通りである。「14時46分の地震発生直後から同規模の余震が30分ほど続く中、15時25分前後から津波が押し寄せ、15時30分前後に最大波がまちを呑み込んだ。津波によって破壊された町からは白煙(家屋倒壊による粉塵)が立ち上がった。「だめだ・・・終わりだ・・・」、皆が口々にそう呟きながらこの光景を呆然と見つめていた」(山内 2014 9)。キャプションは山内宏泰の手になるものである。

2011年3月11日、18時頃に同じく屋上から気仙沼市内湾付近の状況もリア美は撮影している。キャプションは次の通りである。「津波襲来直後から発生した火災は海上に流出した1万2千トンを超える重油等によるもの。海面を埋め尽くす被災物を芯として重油が発火し、繰り返す津波によって火災域が見る間に広がった。大蛇のようにのたうち、空は真っ黒な煙に覆われた。絶望的な光景だった。鎮火したのは12日後だった」(山内 2014 9)。

気仙沼市を襲ったのは地震と津波だけではなく、火災も発生した。火種となったのは海上に流出した重油である。この重油はタンクから流出した¹⁶。そして、2011年3月23日、気仙沼市弁天町の状況もリア美によって撮影されていた。キャプションは次の通りである。「そこに立っている人間と比較してみれば、この

重油タンクがいかに巨大なものか理解できるだろう。直径は10mほどあるだろうか。しかしこの巨大さに対してその固定のされ方はあまりにも貧弱だった。大津波に耐えられる造りにすることはできたはず。「あの波では仕方がない・・・」、それは違う。絶対に流されない構造にしてほしい」(山内 2014 49)。このように山内はキャプションを書いた。地震と津波、火災が気仙沼市をカタストロフィに陥れた。その意味では自然災害を前にして人間ができることは限られている。しかしながら、重油タンクが地面に固定できていれば、重油の流失を防ぐことができたかもしれない。

『東日本大震災 消防活動の記録』¹⁷ (気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部 編集・発行、発行年月 2012 (平成 24) 9 月) からタンクに関する記述を取り上げる。この記録によれば、気仙沼市に設置されていた100キロリットル以上の屋外タンク23基中、22基が津波により流失した。そのうち18基が市内各地で発見された。なお、津波で流される過程でタンク内の危険物は流失し、この流失した危険物が気仙沼湾内で発生し、広範囲に延焼拡大した火災の一因になったものと思われる。屋外タンクが設置されたのは23基中、21基が1968・1969 (昭和 43・44) 年だった¹⁸。

常設展示は「時」系列で陳列されているわけではない。被災物と現場写真は「内容」系列で陳列されていた。したがって、被災物はキャプションによって震災を伝承している。キャプションは「モノ」に関する語りだった。そして、被災物と現場写真が来館者に語りかける物語はいくつもの地層のように重なり合っている。ただし、被災物の持主は特定されてはいない。また、現場写真にはほとんど人物は写っていない。しかしながら、被災物と現場写真から気仙沼市で暮らした人びとの声が来館者の耳に届いたのではないだろうか。これがリアス・アーク美術館における震災伝承である。

常設展示を見学した美術関係者からは「これはインスタレーションですね」という感想をもらうことができるという¹⁹。インスタレーションについて造形作家、川俣正は次のように説明する。インスタレーションという言葉が美術用語として用いられるようになったのは1970年代後半だったと思われる。当初は画廊や美術館など特定の空間に作品が設置された状況そのものを指していた。しかし、「彫刻などの物体を構成した作品とする見方から、その後、設置された空間全体を作品と考える見方になってきた」²⁰。そして、1980年代に入って、日本ではこの時期にインスタレーションの作品が数多く制作され、そこから美術以外の分野にも波及して、インスタレーションという言葉がより広範囲に用いられるようになり、社会的に一般化したのではないだろうか (川俣 2001 32)。リア美の常設展示において陳列されている被災物や現場写真はこの説明にしたがえば、インスタレーションとみなすことができる。

5. 震災ミュージアムと人間形成

福岡市早良区に福岡市民防災センターという防災関連の施設がある。ここでは4つのブースに分かれて防災を体験的に学ぶことができる。4つのブースとは (1) VR 防災体験 (火災・地震・風水害)、(2) 火災発生時の煙からの避難体験、(3) 水消火器での消火訓練、(4) 地震体験・強風体験である。地震に関して言えば、地震が起こったときに、どのように行動したら怪我を防ぐことができるか、どのようにしたら室内の被害を最小限に抑えるかなどを学ぶ。このような防災センターは全国各地に開設されており、近くの小学校が見学に訪れている。その内容は防災に特化した提示となっている。それに対して、リア美は「結果的に防災に結びつく効果“も”期待」できるかもしれない、「構えない防災」²¹を志向したミュージアムである。

では、リア美はどのように子どもたちの人間形成に関わるのだろうか。常設展示では被災物と現場写真が展示されている。前述したように、被災物にせよ、現場写真にせよ、収集されたのは「ありふれた」(日常的な)モノであり、撮影されたのは日常生活が破壊された場所だった。それゆえ、大人ならば、被災物や現場写真のキャプションを読むことによって日常が失われたことに気づくかもしれない。そして、大人ならば、震災前の人びとの暮らしを想起するかもしれない。その意味ではリア美は想起アーキテクチャである。リア美が伝承するのは「災害の記憶」(「非日常の記憶」)というよりもむしろ震災前の「日常の記憶」である。

では、小学6年生が常設展示を見学してどのようなことを感じ、考えるだろうか。ここで目を向けてほしいのは展示物の数量が多いうえに、キャプションの文字数が膨大で、大人でもすべてに目を通すのに約2時間かかることである。そうすると、小学6年生が常設展示を見学することは集中力が続かないため、難しいのだろうか。また、リア美のフロアーには被災物という「ありふれた」モノが並べられている。壊れた洗濯機、泥で汚れた炊飯器や固定電話の受話器などが並べられているのを見て、子どもたちは不思議に思わな

いだろうか。なぜ美術館という空間に、これらのモノがわざわざ陳列されているのかと。山内宏泰とのインタビューにおいて小学校からの見学が少ないことを知ったが、小学生が常設展示を見学するには何らかの仕掛けが必要だと思われる。

常設展示図録の「はじめに」には次のような文章が掲載されている。

「『反省とは未来を考えること』ではないでしょうか。なぜあれほど甚大な被害が発生してしまったのか、私たちがこれから考えるべきことは何なのか。リアス・アーク美術館は皆さんとともにその課題を共有し、未来の為に、地域復興の一翼を担っていきたいと考えております」。

現場写真のところで、屋外タンクについて言及したが、タンクが設置されたのは1968・1969（昭和43・44）年に集中していた。前述したように、「津波襲来直後から発生した火災は、海上に流出した1万2千トンを超える重油等によるもの。海面を埋め尽くす被災物を芯として重油が発火し繰り返す津波によって火災域が見る間に広がった」（山内 2014 9）。

では、なぜタンクの設置がこの2年間に集中したのだろうか。気仙沼市史を調べたが、管見の限りタンクに関する記述を見つけることはできなかった。とはいえ、タンクの設置された時期は気仙沼市の近現代史と関連していると思われる。そうすると、小学生が震災と関連づけて「昔の気仙沼」を学ぶことは「気仙沼の未来を考える」ことにもつながるかもしれない。また、被災物のキャプション（話し言葉で綴られた説明）を読むことは「昔の気仙沼」において人びとが何を想い、どのように暮らしていたかを知るきっかけにもなるだろう。

そこで次のことを提案したい。小学3・4年生ならば、地元＝ふるさと、気仙沼について学ぶはずである。そこで、(a) 教員は小学生をリア美に引率する。リア美の学芸員は解説しながら、もう一つの常設展示「方舟日記～海と山を生きるリアスなくらし～」の見学に同行する。(b) その後、教員は小学生が見学時に感じたことや学んだことを小学校の「ふるさと学習」に関連づけながら授業において取り上げる。そして、(c) 教員はもう一度、小学生をリア美に引率する。その際、リア美の学芸員は常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」をガイドしながら、小学生の見学に同行する。そして、学芸員は陳列されている被災物と現場写真のなかからそれぞれ数点を選んで解説する。そうすると、壊れた洗濯機、泥で汚れた炊飯器や固定電話の受話器など、「ありふれたモノ」がわざわざ陳列されている趣旨を子どもたちは理解できるかもしれない。最後に、(d) 教員が「気仙沼の人びとと暮らし」についてまとめの授業を行う。以上が提案である。

常設展示「方舟日記～海と山を生きるリアスなくらし～」とは地域の歴史・民俗資料を展示したものである²²。それに対して、常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」は東日本大震災被災という重大な出来事を地域の重要な歴史、文化的記憶として伝えるものである²³。

気仙沼市は東日本大震災における当市の被災状況や復旧・復興、被災者支援などの震災発生から復興まで10年間の取り組みを総括した、気仙沼市東日本大震災復興記録誌『海と生きる』を発行した²⁴。この記録誌の書名が「海と生きる」となっていることに注目してほしい。気仙沼市長、菅原茂は記念誌の冒頭、「ごあいさつ」として次のように述べる。

「大震災発生から10年、気仙沼市民の皆さんは家族や親しい人々を失った深い悲しみを抱きつつ、幾多の壁にぶつかり、何度も希望を失いかけても、決して諦めることなく、行政が頼りなく見えても、ただひたすらに、そして真摯に復興を目指し努力を続けてきました。進み具合や道筋はそれぞれであっても、市民の皆さんの逞しく誇るべきその姿に心より敬意を表したいと思います」。

では、なぜ記録誌の書名は「海と生きる」なのか。気仙沼市教育委員会が作成した気仙沼市海洋教育副読本『「海と生きる」を学ぶガイドブックー未来をえがくわたしたちー』には次のように書かれている。

「気仙沼市は、水産業と水産加工業が盛んな港町です。世界三大漁場の一つである三陸沖の豊かな漁場をかかえ、カツオやマグロ、サンマなど多くの魚を水揚げする国内有数の漁業基地として栄えてきました。自然、環境、産業、食、文化、観光、など、気仙沼で生活するわたしたちにとって「海」はとても身近なもの

であり、欠かせないものの一つになっています。

『海と生きる』。これは、震災から力強く立ち上がろう、魅力あふれる気仙沼にしていこうと市民みんなの願いと決意が込められたキャッチフレーズです。気仙沼には、これまで海とともに生きてきた長い歴史と伝統があります。海と生きてきた多くの先人たちの工夫と努力、誇りがあります。そして多くの人たちが、これからも気仙沼の宝を大切にしながら、未来に向かい、互いの知恵と力を合わせて海とともに生きていこうという大きな夢と志を抱き、挑戦しています。気仙沼の人たちの根っこにはいつも「共に生きる海」「未来へとつなげる海」があるのかもしれません²⁵。

地震、津波、火災などによって多くの人命や家屋、生業などが失われた。しかし、三陸沖の豊かな漁場を抱えるがゆえに、これからも水産業と水産加工業によって暮らしていくことを気仙沼市（市民）はあえて選んだ。このように「海と生きる」に込められたメッセージを読むことができるかもしれない。そして、リア美という生涯学習施設は2つの常設展示を通して、学校教育とは異なった形で震災を伝承しようとする²⁶。ここにもガイドブックの題目、「海と生きる」は関わっているだろう。そこで、広島と水俣を参照して、リア美と気仙沼市について考えたい。というのは東日本大震災という「災害」は原爆投下や水俣病という「厄災」と比較しながら考察することによって、リア美のポジショナリティが明らかになるからである。

原爆ドームが立地する平和記念公園はかつて人びとが暮らす町だった。そこでは人びとが往来し、子どもたちが遊んでいた。また、水俣病が発生した不知火海はかつて豊かな海だった。特に水俣湾は魚の産卵場所だったことから、採っても魚がたくさんわいてくる海、「魚わく海」といわれていた。海辺では人びとは漁をしながらおだやかな生活を送っていた。このように原爆投下や水俣病という「負の記憶」が広島と水俣では語り継がれる一方、おだやかな「日常」も見られた。これと同じように、気仙沼市にも震災前にはおだやかな「日常」が存在した。そこで、リア美は震災を契機にして、「日常」の記憶を伝えることを企図した。リア美は2つの常設展示を通して、学校教育とは異なった形で、震災を伝える。そして、これらの展示（表現）が子どもたちの人間形成に関わる。このように「震災ミュージアムと人間形成」を捉えることはできないだろうか。

6. 小括

震災という出来事は被災者の語りによって伝えられることが多い。それは被災者が自ら体験を語ることによって震災を伝承しようと企図したからである。それに対して、リア美では被災物という概念を創出して、震災前のことを表現し、震災を伝承しようと試みた。

このようにリア美は被災物や現場写真などによって震災後の気仙沼市を展示（提示）し、震災前の気仙沼市を想起させ、「震災とは何だったか」を考えるきっかけを来館者に与える。それゆえ、リア美は気仙沼の現在地を知る施設であると言えよう。

最後に「はじめに」で設定した問いに答えるとともに、今後の検討課題について述べたい。

問い (1) 「絵画や彫刻などの美術品を収蔵し展示する美術館において、なぜ震災が伝承されるのか」について。

「リアス・アーク美術館の概要」で述べたが、確かにリア美はその名が示す通り美術館である。しかし、「気仙沼の食を軸とした歴史民俗資料を集めた常設展示『方舟日記』」も展示している。したがって、リア美は「地域の歴史、民俗、生活文化を普及する常設展示を持つ変則的な美術館」である。なお、神山典士が言及したように、リア美は2006年9月に特別展「描かれた惨状 風俗画報に見る三陸大海嘯の実体」を開催した。それゆえ、リア美は絵画によって震災を伝承する役割も果たしていた。

問い (2) 「リア美では何が展示されているのか」について。

常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」に限定すれば、展示されているのは被災物と現場写真である。これらは学芸員、山内宏泰が被災直後から震災被害を記録し調査した成果である。山内は気仙沼の被害をアートによってとらえ、インスタレーションという形で表現した。被災物のキャプションはその所有者が語ったものではなく、「東日本大震災 記録調査活動」において見聞きしたことをもとにして創作された。これはミュージアムとしては極めて異例なことである。

問い (3) 「リア美ではなぜ常設展示によって震災が伝承されるのか」について。

東日本大震災の発災時、「想定外」や「未曾有」という言葉がメディアで繰り返し用いられた。しかし、

明治 29 (1896) 年だけでなく、昭和 8 (1933) 年にも地震と津波によって三陸沿岸は甚大な被害を受けていた。このように繰り返される災害を踏まえて、リア美は津波の物語を語り継ぎ、震災を伝承していかなくてはならないと考えた。常設展示は東日本大震災を記録するだけでなく、「津波の災害史」を伝えていた。

問い (4) 「そもそも震災を伝承するとはどういうことか」について。

この問いに答えることは難しい。震災体験は被災者によって異なる。また、震災を伝達・伝承する方法は多種多様だからである。震災については数えきれないぐらい、報道されている。震災に関するドキュメンタリーも数多く作られた。震災を舞台にした小説やコミック、映画、テレビドラマなども少なくない。そして、多くの被災者が語り部として活動している。さらに、岩手県や宮城県、福島県には震災モニュメントや震災ミュージアムが多数存在する。このように震災は様々な方法で伝えられている。

最後に今後の検討課題を 2 つ挙げる。

山内宏泰は学芸員であるとともに、「気仙沼市東日本大震災伝承検討委員会委員、同遺構検討会議委員および遺構施設展示アドバイザー、気仙沼市復興祈念公園施設検討委員」などを務めた。したがって、山内は気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の設立、気仙沼市復興祈念公園の開設にも関わった。そして、気仙沼市における震災の伝承を担うのがリア美と伝承館であるのに対して、気仙沼市における震災の追悼を担うのが祈念公園である。そうすると、(1) 三者を関連づけて、「気仙沼と震災」というテーマで考察することが今後の検討課題となるだろう。さらに、震災の実状と震災から得られた教訓を伝承する施設群が「3.11 伝承ロード」と呼ばれ、青森県、岩手県、宮城県、福島県に分布している。(2) したがって、広大なエリアに散在する震災伝承施設のなかでリア美について改めて検討するとともに、「3.11 伝承ロード」における震災伝承を明らかにすることも今後の検討課題となるだろう。

注

- 1 本研究では美術館、自然系博物館、歴史系博物館、戦争や疾病、公害をテーマとした資料館を総称してミュージアムと呼ぶ。
- 2 ミュージアムはこれまでどちらかと言えば、美術的評価の高い作品や学術的価値の高い史料を収蔵・展示してきた。しかし、ミュージアムを取り巻く現状を踏まえると、このような運営は見直さなくてはならないかもしれない。国立科学博物館は運営費の支援を呼びかけるために、クラウドファンディング (CF) が行われた。「2001 年度の独立行政法人化以降、運営交付金が減った。さらにコロナ禍による入館者数の減少や、国際情勢の影響による光熱費の高騰が影響。標本や資料を残すため、CF に踏み切ったという」(朝日新聞、2023 年 11 月 7 日)。
- 3 本研究は以下の拙論に続くものである。「原爆投下とミュージアム」(『福岡教育大学紀要 第四分冊 教職科編』第 68 号、2019)。「公害とミュージアム」(『福岡教育大学紀要 第四分冊 教職科編』第 69 号、2020)。

記憶研究が数多くの分野で行われるようになって久しい。震災研究もこのような研究動向のなかに位置づけられるだろう。それに対して、本研究は教育(学)研究として、生涯学習施設に着目して「震災とミュージアム」というテーマで考察した。被災者が体験を語る「コミュニケーション的記憶」に関する研究はこれまで行われている。しかし、ミュージアムによる震災伝承、「文化的記憶」研究は管見の限りほとんど行われていないように思われる。

- 4 「平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震」は気象庁が定めた地震の名称である。それに対して、「東日本大震災」はこの地震によって引き起こされた災害に対して政府として名付けた災害の名称である。国土交通省 気象庁

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/faq/faq7.html#17>

2024 年 8 月 26 日閲覧。

気仙沼・本吉地域広域行政組合消防本部、「東日本大震災における被害と対応について」。

https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/kento004_25_shiryo_04.pdf

2024 年 4 月 22 日閲覧。

- 5 関満博 2022 『気仙沼 震災復興から「未来」に向かう 「海と生きる」』三陸の水産都市』新評論。
- 6 「気仙沼スローフード」都市宣言(2006 年 9 月 27 日)を参照してほしい。

https://www.kesennuma.miyagi.jp/sec/s020/020/010/010/010/010/slowfood_pamphlet.pdf

2024 年 8 月 26 日閲覧。

- 7 山内宏泰氏にはインタビューに長時間、応じていただいただけでなく、リアス・アーク美術館の見学に際して便宜を図っていただいた。これらのことに対して、山内氏には感謝申し上げたい。ただし、学術論文では敬称をつけないことが一般的である。それゆえ、本研究では敬称すべてを省略する。
論者はリアス・アーク美術館において、山内宏泰に 2023 年 12 月 9 日にインタビューした。その際、山内は繰り返し「アート」という言葉を用いた。略歴は以下の通りである。リアス・アーク美術館館長。美術家。1971 年宮城県石巻市生まれ。常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」を企画担当。気仙沼市東日本大震災伝承検討委員会委員，同遺構検討会議委員および遺構施設展示アドバイザー，気仙沼市復興祈念公園施設検討委員。2004 年宮城県芸術選奨新人賞受賞，2017 年，棚橋賞受賞。【山内宏泰の略歴については姜信子・山内宏泰ほか 2024 『被災物 モノ語りは増殖する』 かたばみ書房より引用した】。
棚橋賞については公益財団法人日本博物館協会の HP が詳しい。当協会は「博物館研究」掲載原稿の中から選ばれた優秀な論文に対して，棚橋賞を授与している。
<https://www.j-muse.or.jp/project/commendation/>
2024 年 4 月 22 日閲覧。
- 8 リアス・アーク美術館常設展示図録「東日本大震災の記録と津波の災害史」，「はじめに」。
- 9 神山典士 2012 「津波の記憶を語り継ぐため 今こそ文化の力が必要とされている 宮城県気仙沼市」（財団法人地域創造 『地域創造』 Spring 2012 vol.31）。
- 10 海嘯とは「満潮時に遠浅の海岸や特殊な河口部に起こる高波」のことであり，「誤って，『つなみ』の意にも用いられる」（上野善道ほか 2020 『新明解国語辞典 第八版』 三省堂）。
- 11 常設展示は「あいちトリエンナーレ 2013」においても関心を集めた。「あいちトリエンナーレ」とは愛知県で 3 年に 1 度開催される国内最大級の現代アートの祭典である。2013 年のテーマは「揺れる大地 われわれはどこに立っているのか：場所，記憶，そして復活」で，東日本大震災後のアートを意識しつつ，国内外の現代美術やダンス，演劇などが紹介された（『あいちトリエンナーレ 2013 開催報告書』）。朝日新聞（2013 年 9 月 10 日）によれば，リアス・アーク美術館は「被災語る気仙沼の美術館」として紹介された。
- 12 この報告書は付録として，リアス・アーク美術館常設展示図録の末尾に付されている。
- 13 リアス・アーク美術館は宮城県が施設を整備し，管理運営は気仙沼市と南三陸町で構成する気仙沼・本吉地域広域行政事務組合が行っている。
- 14 同様の取り組みと思われるものとして，復元模型を挙げたい。磯村和樹・槻橋修 2024 「復元模型「あの日」より前の風景，街並み，そこでの記憶を復元する」（高森順子編 『残らなかったものを想起する「あの日」の災害アーカイブ論』 堀之内出版）。磯村らは東日本大震災の被災地で「失われた町」模型復元プロジェクトという活動に取り組んできた。この活動は震災で失われた風景や街並みを復元し，そこで暮らした人々の記憶を記録するものである。
- 15 文化財レスキューについては独立行政法人国立文化財機構文化財防災センターの HP を参照した。
https://ch-drm.nich.go.jp/disaster_response/rescue.html
2024 年 4 月 16 日閲覧。
- 16 火災とタンクについては「933 てんでんこ 海が燃えた日（1）」（朝日新聞 2023 年 9 月 26 日）を参照してほしい。
- 17 『東日本大震災 消防活動の記録』は「宮城県図書館 東日本大震災アーカイブ」に収められている。また，関満博『気仙沼 震災復興から「未来」に向かう「海と生きる」三陸の水産都市』（新評論 2022）には気仙沼市朝日町に設置された漁船供給用の油槽所の写真が掲載されている。気仙沼市は豊かな水産資源でも知られる三陸沿岸地域のなかでも全国有数の漁港基地として発展したまちである。なお，『東日本大震災 消防活動の記録』によれば，これまで約 40 年に 1 回の頻度で大地震と大津波が三陸沿岸において発生していた。
- 18 屋外タンクの設置年は気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部に公文書公開請求により問い合わせた。
- 19 これは論者が山内宏泰に 2023 年 12 月 9 日にインタビューした際に伺ったエピソードである。そして，2024 年 5 月 31 日にも山内にインタビューした。なお，論者がリアス・アーク美術館を初めて訪問したの

は2022年12月11日である。ただし、このときはインタビューは行わず、同館を見学しただけである。

20 川俣正 2001 『アートレス マイノリティとしての現代美術』 フィルムアート社。

21 田中隆文 2021 『災害展示論』 古今書院。

田中隆文は本書において、災害展示の課題を検討するなかで、「構えない防災」という立場を提案する。災害展示において目指すのは「ほころびのない完成度の高い『災害展示』の実施」ではなく、「結果的に防災に結びつく効果“も”期待する企画」であるという。そこで、柔軟に位置づけた災害展示を、田中は「自然体としての『構えない防災』」と名づけた（田中 2021 22）。

本書の奥付によれば、田中は「幼少時に台風で自宅が全壊」し、それ「以降、防災に強い関心」を抱いた。そして、「ガラス細工のような精緻化された科学の脆さを危惧し、地に足のついた泥臭い科学の可能性を探究」するようになったという。田中は現在、名古屋大学 生命農学研究科 森林水文・砂防学研究室 准教授で、名古屋大学 減災連携研究センター協力教員も務めている。

22 リアス・アーク美術館歴史・民俗資料常設展示図録『方舟日記～海と山を生きるリアスなくらし～』（2019）。

なお、本図録は『まるかじり気仙沼ガイドブック～気仙沼の食・文化・歴史・観光～』（2008年2月20日）をもとにして作成された。そして、このガイドブックは2008年6月5日に市販版も発行された。さらに、『【2012復刻版】 まるかじり気仙沼ガイドブック～気仙沼の食・文化・歴史・観光～』が2012年11月25日に発行された。発行したのはスローフード気仙沼、監修は山内宏泰（スローフード気仙沼理事）である。

リアス・アーク美術館歴史・民俗資料常設展示図録『方舟日記～海と山を生きるリアスなくらし～』では「歴史・民族資料」について次の通り言及されている。

「歴史・民族資料常設展示『方舟日記』は、食文化を通して地域のアイデンティティや魅力を再確認する場所として地元住民や観光客が多く訪れるだけでなく、地域文化学習の場としても積極的に活用されてきました。（中略）当館は、過去の文化を温存するだけの施設ではなく、未来に向けて、過去と現在を強固に結び付け、地域文化をさらに発展させることを目標とする博物館です」（山内 2019a 3）。

なお、『【2012復刻版】 まるかじり気仙沼ガイドブック～気仙沼の食・文化・歴史・観光～』は2024年5月31日にインタビューした際に、山内氏より頂戴した。

23 リアス・アーク美術館常設展示図録『東日本大震災の記録と津波の災害史』（2014）の「はじめに」を参照した。

24 気仙沼市役所のサイトから、記念誌の本文を閲覧できる。

<https://www.kesennuma.miyagi.jp/sec/s227/010/20220202134927.html>

2024年4月19日閲覧。

25 気仙沼市教育委員会が制作した、気仙沼市海洋教育副読本『「海と生きる」を学ぶガイドブックー未来をえがくわたしたちー』は下記より読むことができる。

<https://www.kesennuma.miyagi.jp/edu/sl62/allpages.pdf>

2024年4月21日閲覧。

26 学校では教員が授業において教科書を使って、児童生徒に教えるのが常である。それに対して、リア美など、ミュージアムには教員は存在しない。そのため、他の来館者を妨げなければ、誰でも自由にミュージアムを見学・鑑賞することは可能である。

引用・参考文献

アストリッド・エアル 山名淳訳 2022 『集合的記憶と想起文化』 水星社

アライダ・アスマン 安川晴基訳 2019 『想起の文化』 岩波書店

川村清志 2023 「節合される声とモノ、共創される「津波文化」 リアス・アーク美術館の震災展示から」（『国立歴史民俗博物館研究報告』 第240集）

川島秀一 2017 『海と生きる作法 漁師から学ぶ災害観』 富山房インターナショナル

川俣正 2001 『アートレス マイノリティとしての現代美術』 フィルムアート社

姜信子 2024 『被災物 モノ語りは増殖する』 かたばみ書房

皓星社編集部編 2022 『＜記憶の継承＞ミュージアムガイド 災禍の歴史と民族の文化にふれる』 皓星社

- 神山典士 2012 「津波の記憶を語り継ぐため 今こそ文化の力が必要とされている」(『地域創造』 Spring 2012 vol.31)
- 榎木野衣 2017 『震美術論』 美術出版社
- 高森順子編 2024 『残らなかったものを想起する 「あの日」の災害アーカイブ論』 堀之内出版
- 関満博 2022 『気仙沼 震災復興から「未来」に向かう 「海と生きる」』 三陸の水産都市』 新評論
- 田中隆文 2021 『災害展示論』 古今書院
- 山内ヒロヤス 2008 『砂の城』 近代文芸社
- 山内宏泰 2014 『リアス・アーク美術館常設展示図録 東日本大震災の記録と津波の災害史』 リアス・アーク美術館 (本研究では2020年3月11日, 第4版第1刷を参照した)
- 山内宏泰 2015 「正面から向き合い伝える」(河北新報編集局編 『表現者たちの「3・11」 震災後の芸術を語る』 河北新報出版センター)
- 山内宏泰 2016 「博物館が復興に果たす役割」(『博物館研究』 vol.51 No.10 (No.580))
- 山内宏泰 2019a 『リアス・アーク美術館歴史・民俗資料常設展示図録 方舟日記～海と山を生きるリアスなくらし～』 リアス・アーク美術館
- 山内宏泰 2019b 「博物館展示における震災資料展示の課題と可能性 災害資料展示施設の普遍的ミッション構築のための研究とその意義」(『国立歴史民俗博物館研究報告』 第214集)
- 山内宏泰 2020 「記憶の回収と修復から, 表現の創出へ」(赤坂憲雄編 『災害とアートをさぐる』 玉川大学出版部)
- 山内宏泰 2021 「山内宏泰 リアス・アーク美術館 津波と故郷の記憶を物と言葉からイメージしてもらうために」(『美術手帖』 vol.73 No.1087)
- 山内宏泰 2022 「災害被災物の文化的意味について」(慶應義塾大学アート・センター 『モルフ／アンティ・モルフ 「場をめぐるイメージ論」 慶應義塾大学アート・センター
- 山内宏泰 2022 『リアス・アーク美術館 東日本大震災発生10年特別企画展 あの時, 現在そしてこれから 参考資料集』 リアス・アーク美術館
- 山名淳・矢野智司編 2017 『災害と厄災の記憶を伝える 教育学は何ができるのか』 勁草書房
- 鷺田清一 2016 『素手のふるまい アートがさぐる<未知の社会性>』 朝日新聞出版社

謝意

インタビューに長時間, 応じてくださったこと, リアス・アーク美術館内の撮影を許可くださったこと, 『【2012 復刻版】 まるかじり気仙沼ガイドブック～気仙沼の食・文化・歴史・観光～』をお譲りくださったことなどに対して, 山内宏泰氏にこの場を借りて心より感謝申し上げたい。